

1-2 腰椎圧迫骨折高齢患者の効果的な退院指導方法の検討

由田 直美(赤穂市民病院)

I. はじめに

高齢腰椎圧迫骨折患者の中には退院後の生活がイメージできず、具体的な指導を受けないまま退院した患者がいた。そのため、腰椎圧迫骨折高齢患者に対し、退院に向けて意欲的になれるような指導方法ができたのか、安全な入浴動作が修得できたのか、指導方法のあり方を検討する機会となったのでここに報告する。

II. 研究方法

- 1) 対象：A 氏 78 歳 女性 第5腰椎圧迫骨折
- 2) 調査期間：平成 23 年 2 月 11 日～17 日
- 3) 調査内容：腰への負担をかけない入浴方法の指導と被験者の反応を、5 段階評価(1；できない, 2；声かけをしてもできない, 3；一部介助すればできる, 4；見守りでできる, 5；できる) と入浴時の腰痛の程度を¹⁾インスケール 5 段階で評価した。
- 4) 調査手順：
 - (1) 腰への負担をかけない入浴動作について、評価表①を用いて説明を行う。
 - (2) 腰への負担をかけない入浴動作について、評価表②を用いて説明し、看護師が A 氏に方法を実演する。
 - (3) 浴室で、A 氏に腰への負担をかけない動作を実演してもらう。
- 5) 分析方法：
 - (1) 腰への負担をかけない入浴方法評価①、②、③の指導後の A 氏の評価内容に対する発言内容、安静時と入浴時の腰痛の程度 (pain スケール 1～5 段階) を比較した。
 - (2) ③については評価表③を用いて 5 段階で評価の変化を解析した。
- 6) 倫理的配慮

本研究は平成 24 年赤穂市民病院看護研究倫理審査に承諾を得た。調査対象者には、口頭及び文書を用いて、研究目的、方法、個人情報守秘や研究への自由意思での参加、不利益がないこと、平成 24 年度の院内研究発表および論文集に掲載予定であることを具体的に説明し、同意書への署名を得た。

III. 結果

A 氏に入浴動作が修得できるように段階的に、ベッドサイドで入浴動作のポイントについて説明し、次に、浴室で説明しながら、看護師が動作を実演した。A 氏はコルセットの着脱のタイミングや腰へ負担のかかる動作は理解したが、浴槽へ入ることに対しては「家の風呂と違うからこわいわ。」と発言があったが、その後、実際に入浴した。1 回目の入浴では、不安な発言が見られ、声かけや一部介助が必要であった。2 回目の入浴は、ほとんど介助することなく、入浴できた。

指導後、A 氏は「なんとかできたわ。腰ねじったりせんように気をつけなあかん。家では浴槽に入れそうやわ。」と発言した。

IV. 結論

今回、入浴動作の説明だけでなく、看護師が動作を実演したことで、実際に A 氏は自らが入浴する動作が想起でき、どのようにすればよいのか具体的な方法を修得できたと考えられる。また、A 氏の自宅の浴室の構造に合わせて、浴槽への出入りについて説明を行った。自宅の浴室の構造は個々の家庭で異なるため、それに合わせて指導内容を変えていく必要があり、そうすることでより効果的な指導ができると考えられる。